①『社会科学の方法：ヴェーバーとマルクス』

大塚久雄著　岩波書店　1966（岩波新書）

②『経済発展の理論：企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究』上・下

シュムペーター著　岩波書店　1977（岩波文庫）

経済学部准教授　西村 弘

①　歴史や社会の発展を規定するのは経済であり、経済の変化に応じて政治、法律、道徳、文学、芸術や宗教などの意識の諸形態が変化するという歴史観がある。しかしそれが、経済さえ変革すれば事足りて、人間の精神の自由は二次的なものであるという考えに進めば、人間社会は窮屈なものになる。逆に人間の意識が経済社会を動かすということもあるのではないか。著者はM. ヴェーバーに依拠しながら経済決定論的な歴史観に対峙し、経済的諸関係からは最も縁の遠そうな宗教形態、特には西欧社会の日常意識となったプロテスタンティズムの倫理が、歴史や経済社会に与える影響を検証する。

原罪を背負った人間がいかに神に接近しうるかは、中世カソリック教会では金銭の授受に求めることにまで堕し、免罪符を付与するまでになった。宗教改革はルターをして聖書の耽読が人間を神に近づける道だと説かせたが、プロテスタントは各人に授けられた職業に打ち込むことによってその道は開かれるとし、宗教を万人の下に開放した。勤労と節約によるこうした原罪払拭に向ける自己否定的な営為の結果、西欧では飛躍的な経済的発展を遂げたのであり、むしろ人間の意識が経済的な変化を規定し促進したという逆説的な考えを提供するのが本著である。生きるためにはパンが必要だが、同時に人はすぐれて精神的な存在であって、パンのみにて生きるにあらずということの意味を、社会科学の方法にまで高めようとした名著であり、難解なヴェーバーを理解する案内書としても有益である。

②　ヴェーバーの同時代人であるシュムペーターは、経済において人間が果たす役割を強調した人であり、本著はその代表作となる。資本主義の最先進国であったイギリスに対抗して、ドイツ圏では途上国の立場からスミスやリカードウの純粋理論体系を世界主義的経済学として排斥し、途上国独自の経済学が必要との観点から発展段階説にもとづく歴史学派という流れを形成していたが、次第にそれは理論離れの傾向を強めていった。

そうした伝統に限界理論という普遍的純粋理論を植え付けようと切り込んだのがシュムペーターと同門のメンガーであり、限界学派はワルラスの一般均衡理論で頂点に達した。そのワルラスの影響を強く受けつつ、かれの数式に満ちた静学止まりの経済理論を克服して、資本主義の本質は技術革新（広くは新結合）によって展開されるダイナミックな動態的システムであるということを、歴史学派のような単なる歴史記述としてではなく、理論として展開したのが、本著である。

本著によれば、資本主義のエンジンは「発展」であり、これを稼働させるのは伝統と慣行にとらわれない独創的才覚と決断力をもった「企業者」という人間である。好況に始まる景気循環の最初のひと突きは、他ならぬ人間たる「企業者」の手によって動かされ、ワルラス的な均衡世界を一網打尽に攪乱・破壊するのが、むしろ資本主義の姿なのだと力説される。経済発展を景気循環という理論的な問題に還元しようとする試みも、また魅力的である。